

# 第27回 ('16)

# 書学書道史学会大会

於：滋賀大学教育学部キャンパス

10/ 1 sat.

- 13：00～ 受付開始
- 13：30～14：30 開会式・総会  
研究発表
- 14：40～15：10 ①徳泉 さち
- 15：10～15：40 ②正岡 知晃  
パネルディスカッション
- 16：00～17：45 中村 史朗 笠嶋 忠幸  
尾川 明穂 川畑 薫  
星子 桃子 六人部克典
- 18：00～19：30 懇親会

10/ 2 sun.

- 09：00～ 受付開始
- 研究発表
- 09：30～10：00 ③成田健太郎
- 10：00～10：30 ④宮崎 洋一
- 10：30～11：00 ⑤菅野 智明
- 11：00～11：10 休憩
- 11：10～11：40 ⑥福田 哲之
- 11：40～12：10 ⑦澤田 雅弘
- 12：10～13：50 記念撮影・昼食・参観  
講演会
- 13：50～15：20 杉村 邦彦
- 15：30～15：40 閉会式



本年度大会会場の滋賀大学教育学部キャンパスへのアクセスは、下記のとおりです。

## アクセスマップ



## キャンパスマップ



住所：〒520-0862 滋賀県大津市平津2-5-1

- 当印刷物は、大会当日にお持ちください。
- カラー版は、ホームページで確認できます。
- 大会用ポスターのデータをホームページにアップします。必要に応じてプリントアウトし、関係各所にご掲示ください。

書学書道史学会  
ASSOCIATION FOR CALLIGRAPHIC STUDIES  
<http://shogaku-shodoushi.org/>

## 大会関係各種連絡事項

- 大会参加申込みは、必ず同封の「大会出欠確認はがき」に必要事項をご記入の上、9月21日(水)必着でご投函をお願いします。
- 理事・監事・諮問委員各位においては、必ず同封の「大会出欠確認はがき」にて理事会出欠のご回答をお願いします。幹事各位においても、同様に資料封入作業の出欠のご回答をお願いします。いずれも、昼食準備数を把握する関係上、ご回答にご協力ください。
- 幹事各位には、資料封入作業のほか、受付や大会運営のご協力をお願いしていますので、ご承知おきください。
- 大会参加費(資料代含む)・懇親会費・2日(日)昼食弁当費は、同封の「払込取扱票」に印し、9月21日(水)までに事前納入してください。念のため、振込控えは大会当日にお持ちください。
- 本学会大会では、会員の方が非会員の同伴参加を認めています。「大会出欠確認はがき」および「払込取扱票」にその旨(氏名・人数等)を明記の上、「払込取扱票」にて会員ご自身と同伴非会員との額を合算してお振込みください。ただし、会員1名につき、同伴非会員1名が無料です。
- 大会参加費は、会員4,000円、学生会員2,000円です。ただし、会員1名につき、同伴非会員1名が無料で、それを超える場合、同伴非会員一般は1名につき4,000円、同伴非会員学生は1名につき2,000円の大会参加費が必要です。
- 懇親会参加費は、会員5,000円(同伴非会員一般も同額)、学生会員2,500円(同伴非会員学生も同額)です。
- 2日(日)昼食弁当費は、一律1,000円(飲物付き)です。事前申込み以外、大会会場での追加注文の受け付けはできませんので、注文希望の方は必ず「大会出欠確認はがき」にてお申込みください。
- 1日(土)のパネルディスカッション、および2日(日)の講演会は、事前の申込みが不要で聴講無料です。非会員や学生にもお知らせ、お勧めいただければと思います。

	大会参加	懇親会参加	2日昼食弁当	計
一般会員	○	○	○	10,000円
	○	○	×	9,000円
	○	×	○	5,000円
	○	×	×	4,000円
学生会員	○	○	○	5,500円
	○	○	×	4,500円
	○	×	○	3,000円
	○	×	×	2,000円

- 年会費未納の方は、「払込取扱票」に記載の未納分を合算して速やかにお振込みください。
- 懇親会は、大会初日の1日(土)18:00より、生協食堂内喫茶室で行います。
- キャンパス周辺の飲食店は休日のため、閉まっています。2日(日)の昼食については、事前申込みの弁当をご利用いただくか、昼食をご持参ください。ちなみに、コンビニエンスストアは、会場からやや離れた場所にあります。
- 宿泊ホテル等については、すでに会報でお知らせしたとおり、役員・会員ともに事務局では一切手配しません。
- 大会当日の緊急連絡先は、事務局長・高城の携帯(090-9684-9782)とします。

## 第27回('16)書学書道史学会大会プログラム

今年度の大会は、10月1日(土)・2日(日)の両日、滋賀大学教育学部キャンパスにおいて開催します。日程の詳細が決まりましたので、ご案内申し上げます。研究発表に加え、パネルディスカッションおよび講演会を企画いたしました。多数のご参加をお待ちしております。

### 〈日 程〉

(会場はいずれも滋賀大学教育学部キャンパス内)

#### 【10月1日(土) 第1日目】

11:00~12:50 理事会(第3講義室)

13:00~ 受付開始(大講義室)

13:30~14:30 開会式・総会(大講義室)

14:40~15:40 研究発表(大講義室)

①14:40~15:10 「北魏平城時代の巡行碑について」

徳泉さち(早稲田大学會津八一記念博物館)【司会:小川博章】

②15:10~15:40 「呉隱の「印学」観とその展開」 正岡知晃(筑波大学大学院生)【司会:河内利治】

16:00~17:45 パネルディスカッション(大講義室) ※聴講無料

「書学・書道史学と美術館・博物館の連携を考える」

司会:中村史朗(滋賀大学)

コーディネーター:笠嶋忠幸(出光美術館)

パネラー:尾川明穂(五島美術館)

川畑 薫(八幡市立松花堂庭園美術館)

星子桃子(名古屋市立博物館)

六人部克典(東京国立博物館)

18:00~19:30 懇親会(生協食堂内喫茶室)

#### 【10月2日(日) 第2日目】

09:00~ 受付開始(大講義室前)

09:30~12:10 研究発表・午前の部(大講義室)

③09:30~10:00 「碑帖拓本デジタルデータに対するメタデータ付与の手法」

成田健太郎(東京大学附属図書館)【司会:菅野智明】

④10:00~10:30 「明清時代の「顔真卿」—宋元時代の評価などとの比較を中心に—」

宮崎洋一(広島文教女子大学)【司会:大橋修一】

⑤10:30~11:00 「「扶桑再遊記」にみる羅振玉と日本人 —社会的ネットワーク分析の視点から—」

菅野智明(筑波大学)【司会:弓野隆之】

11:00~11:10 休憩

⑥11:10~11:40 「泰山刻石拓本の古文字学的検討」

福田哲之(島根大学)【司会:中村伸夫】

⑦11:40~12:10 「三井本十七帖考 —香港中文大学文物館北山本との比較をもとに—」

澤田雅弘(大東文化大学)【司会:富田 淳】

12:10~13:50 記念撮影・昼食

「巖谷一六遺墨、関係資料展示」(第2講義室) 参観

13:50~15:20 講演会(大講義室) ※聴講無料

「明治初期の巖谷一六とその書法 —新出の『巖谷一六日記』を基にして—」

杉村邦彦(本学会名誉会員、京都教育大学・四国大学名誉教授)

15:30~15:40 閉会式(大講義室)

## 発表とその他の連絡事項

- 発表者の持ち時間は、30分(発表時間20分、質疑応答10分)です。発表に際しては、時間厳守でお願いいたします。
- 発表者各位においては、**発表資料は、B4版両面印刷（複数枚の場合は綴じること）として200部をご作成いただき、9月28日(水)までに、下記の宛先へ送付をお願いします。**  
〒520-0862 滋賀県大津市平津 2-5-1  
滋賀大学教育学部国語教育講座 中村史朗（中村研究室）宛  
☎077-537-7724  
※送付伝票備考欄に「書学書道史学会研究発表資料在中」と記載してください。
- 発表会場にはプロジェクターが設置されています。ご利用の場合、当日、USBメモリー等をご準備ください。試写は、研究発表前の空き時間を適宜ご活用ください。なお、プロジェクターを使用される方は、資料送付の際に、その旨をお知らせください。
- 各発表の司会者は、専門分野を考慮の上、振り当てました。ただし、諸般の事情により、司会者に変更が生じる場合があります。
- 理事・監事・諮問委員の方は、10月1日(土)11:00より「第62回定例理事会」を開催いたしますので、理事会開催会場の「第3講義室」へご参集ください。**
- 幹事の方は、10月1日(土)10:30に理事会開催会場の「第3講義室」へご参集ください。**

### ①北魏平城時代の巡行碑について

徳泉 さち

北魏時代の石刻の書、とりわけ龍門造像記は中国書法史において注目され、研究も重ねられてきた。そのためか、それを遡る平城（山西省大同市）に都が置かれた時代の書については等閑視されがちであったといえよう。本発表では、河北省易県に所在が伝えられている「太武帝東巡碑」（太延三年・四三七）と山西省靈丘県覺山寺に現存する「文成帝南巡碑」（和平二年・四六一）という平城時代の二碑に着目したい。ともに皇帝の巡行先に立てられ、その治世を讃える文章が刻まれており、当時の代表作として重視すべきものである。

先行研究では、碑文内容について歴史的な検討が加えられてきたものの、書様式や石碑の形状などについての研究は十分になされていない。さらに、この二基の巡行碑の制作意図や、石碑そのものが果たした機能についても追究されてこなかった。本発表では巡行碑が立てられた地理的条件や時期、碑文内容や書様式を糸口に、誰に何を伝える意図が込められていたのか検討してみたい。そもそも石に文字を刻み残す、という営為は長い伝統をもつ漢族の文化である。なかでも、皇帝の行状を伝える残す巡行碑は、秦の始皇帝の七刻石を嚆矢とする実に中華的なモニュメントといえる。それを踏まえて、鮮卑皇帝の巡行碑が存在することの意味を問い直す必要がある。平城時代は、武力により華北を支配した北魏国家が漢民族を統治する正統性が求められた時期といえる。巡行碑の制作には鮮卑皇帝が漢民族を統治するに足る漢文化を十分に具えていることをアピールする意図があったのではなからうか。すなわち、石碑という造形物そのものが漢化を象徴するモニュメントとして機能したと考えられる。また、そこに刻まれる書も意識的に選択されたことが想定される。平城時代にどのような書が正統とされたのかについても合わせて検討していきたい。

（早稲田大学會津八一記念博物館）

## 第27回（'16）書学書道史学会大会レジュメ【10月1日（土）】②15：10～15：40 発表・正岡知晃／司会・河内利治

## ② 吳隱の「印学」観とその展開

正岡 知晃

吳隱（一八六七～一九二二）は西泠印社創立に関わった人物として著名だが、彼に関する先行研究ではその出版活動が特に注目される。彼が印譜等の出版を通して、篆刻界を振興したことはすでに多くの指摘が見られる。それら吳隱の出版物を管見の及ぶ限り実見したところ、「印学」という語の使用が随所に見られることが分かった。

印学という語の使用について見ると、清代末の馮承輝『印学管見』に初めて書名としての使用が見られるものの、当時一般的に使用された用語であったとは言い難い。吳隱は『遜齋集古印存初集』（一九〇八年）の序文で印学という語を初めて使用するが、この時期彼は上海で独自に立ち上げた上海西泠印社で活動を始めており、この印譜はここから発刊されたものであると指摘される。この印学という語の使用が、一九一四年に定められた西泠印社の宗旨「保存金石、研究印学」へ、少なからず影響を与えたのではないか。

そこで本発表では、吳隱の「印学」とはどのようなものであったかを明らかにすると共に、その「印学」観が吳隱以降どのように展開されたのかを探ってゆくことにする。これにより、西泠印社の宗旨成立の背景や、印学という用語が社会的に認められてきた端緒を知ることが可能になると思われる。

吳隱は金石関連書籍の編纂により、金石学を構成する諸領域が、印学の学問体系の構築に際しても一部を共有させることが必要であると考えていたようである。しかし『遜齋印学叢書』に収められる印論や、上掲の印譜に附された序跋文によれば、金石学とは一線を画した、独立した学問を志向している。吳隱以降、西泠印社社員によって印学という語は使用されるようになるものの、金石学との関連性を踏まえて印学を捉える言及はあまり見られない。馬衡によって改めて金石学との関連を保ちながら印学の独立が主張され、当時における吳隱の印学への考えが先進的であったと推察される。

（筑波大学大学院生）

## 第27回（'16）書学書道史学会大会レジュメ【10月2日（日）】③09：30～10：00 発表・成田健太郎／司会・菅野智明

## ③ 碑帖拓本デジタルデータに対するメタデータ付与の手法

成田 健太郎

東京大学総合図書館で貴重書に指定されている蔵書には、二十七件の碑帖拓本資料が含まれ、貴重書以外も含めれば全国有数の碑帖拓本コレクションとなつている。発表者の所属する東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門では、アジア関係研究資料デジタル化計画の一環として、これらの碑帖拓本資料のデジタル化作業に着手し、目下デジタル撮影を進めているが、そのデジタルデータを公開するにあたっては、各データにメタデータを付与する必要がある。

メタデータとは、当該データの属性を記述した情報を言う。メタデータの項目と記述内容を定める規格は、データの性質に応じて多種多様であり、図書館・博物館・美術館の境を越えた統合ないし共有の必要性も議論されている。碑帖拓本資料のデジタル化と公開を全国の所蔵機関に拡大し、デジタルデータを研究資源として適切に共有するためには、碑帖拓本の資料としての特質に対応でき、明確で、細かすぎずまた簡略すぎないメタデータ規格が用意される必要がある。碑帖拓本資料は、撰文、書、鐫刻、採拓、装裱等幾層もの著作にかかわる属性を背負っており、そのような階層構造をメタデータにおいて明晰に示すことは一つの課題といえる。また、図書に対する書誌記述と違って、デジタルデータはデータごとにメタデータを付与する必要があり、研究資料としての新たな利点が生まれる可能性もある。

国内外で碑帖拓本資料に適用されている各種目録規則の有効性については、菅野智明氏らによる一連の研究があるが、本発表では、これらを踏まえて碑帖拓本の属性記述の課題を確認したうえで、国内外の所蔵機関において碑帖拓本に適用されているメタデータ規格の実例を分析し、世界で提案されている主要なメタデータ規格との互換性にも配慮しつつ、現実的かつ有用なメタデータ規格を提案したい。

（東京大学附属図書館）

## ④ 明清時代の「顔真卿」——宋元時代の評価などとの比較を中心に——

宮崎 洋一

拙稿「宋元時代の「顔真卿」」(書学書道史学会編『国際書学研究/2000』萱原書房、二〇〇〇年)において、書作品の後の時代における享受の視点に立って、宋元時代の顔真卿に関する史料を収集し、歴史書の節略本の記載、顔魯公祠、文献所載の書作品、書作品への評価、などについて検討し、宋代に顔真卿の書が多く残っていたと考えられること、宋代の評価や印象は現在とは異なっていたと思われること、などを指摘した。

拙稿での課題のうち、歴史書の節略本の記載や顔魯公祠の状況については、すでに明清時代の状況を検討しているため、今回の発表では、文献所載の作品の状況が宋代からどのように変化して現在のどのような現存状況になったのか、現在とは異なっていた書に対する評価や印象から、どのように現在用いられている評価や印象に変化し定着していったのか、などについて、新たに収集した明清時代の史料などを用いて考えるところにも、あわせて南宋時代の拓本と清代の翻刻が残る『忠義堂帖』の比較などを通して、上述の印象の広がりについても考えてみたい。

(広島文教女子大学)

## ⑤ 「扶桑再遊記」にみる羅振玉と日本人

——社会的ネットワーク分析の視点から——

菅野 智明

辛亥革命を契機に、大量の中国書画が日本へ渡ったことは、収蔵史や文化交流史の点から面的な事象として注目されている。時に革命の乱を避けて京都に移住していた羅振玉(一八六六—一九四〇)は、かかる中国書画の日本流入において中心的な役割を果たした一人とされ、それら書画の影印出版を主導した点からも特筆される人物である。ところが羅は、革命以前に清の官僚として日本を視察し、主として東京在住の中国文化に精通する日本人との交流から、当地に渡った中国の書画・金石・典籍等、各種文物の集中的な縦覧を実現させていた。その模様は羅の日記「扶桑再遊記」(一九〇九年)に具に記されている。

既に発表者は、従来見過ごされてきたこの日記の分析と、視察後に帰国した羅が書道振興会(西東書房)の出版を支援した経緯に鑑み、羅が京都移住後に本格化させた中国書画の紹介と、その影印出版に関する活動の萌芽的素地は、東京訪問の時点で形成されていたことを明らかにした。しかし、羅の日記にみる人的ネットワークの分析に際しては、その計量化など更なる客観的な方法の導入が課題となった。交わった個々の日本人との関係の如何にもまして、形成されたネットワークの構造それ自体が、羅の訪日の成果を左右する鍵となるようである。この点の解明は京都移住後の羅の動向を窺う上でも不可欠と考える。

以上により本発表では、社会科学分野で頓に成果をあげている計量的な分析方法「社会的ネットワーク分析」を導入し、それにより「扶桑再遊記」にみる羅と日本人とのネットワーク構造の特徴を明らかにするとともに、それが羅の訪日成果に影響を与えた可能性について検証することを目的とする。なお本発表では、社会的ネットワーク分析にかかるグラフ化や各指標の解析を中心に、筑波大学ビジネスサイエンス系・猿渡康文教授のご支援を得た。これを踏まえ、菅野が関連諸史料を勘案した包括的な考察を担った。

(筑波大学)

## 第27回 ('16) 書学書道史学会大会レジュメ【10月2日(日)】⑥11:10~11:40 発表・福田哲之/司会・中村伸夫

## ⑥泰山刻石拓本の古文字学的検討

福田 哲之

泰山刻石は、秦の始皇帝が統一後に各地を巡幸して立石した秦始皇刻石の一つであり、拓本には乾隆五年(一七四〇年)の火燬以前の二十九字本の他、北宋拓とされる明の安国旧蔵の五十三(二)字本(三井聰冰閣蔵)、同じく百六十五字本(台東区立書道博物館蔵)が伝存し、当時の小篆の典型を示す貴重な資料と見なされてきている。その一方で、二十九字本のもとになった残石は原石ではないとする翻刻説もすでに清代において提起されており、泰山刻石拓本の資料的信憑性については、現在もお議論の分かれるところである。

翻刻説の論点は多岐にわたるが、古文字学の観点から注目されるのは、容庚氏が宋の劉跂の「泰山秦篆譜」と関連をもつ『絳帖』本との比較を通して、百六十五字本の「靡」字の形体上の問題を指摘し、同石と見なされる五十三(二)字本および二十九字本をすべて原刻ではないとする見解を示していることである(「秦始皇刻石考」一九三五年)。これについては裘錫圭氏も、「靡」字に加えて「臨」字・「平」字にも古文字資料との間に形体上の齟齬が認められることを指摘し、翻刻説を支持している(「秦漢時代の字体」一九九三年)。

これに対して我が国では、疑点の存在を認めながらも原刻と見なす立場や、真偽を確定したいとして保留する立場などが大勢を占め、概して翻刻説にはにわかには左祖しがたいとする傾向がうかがわれる。その後には、従来指摘されてきた問題点はいずれも限定的な範囲にとどまり、旧拓本の資料性を全面的に否定し得るほどの根拠とは見なしがたい、との慎重な判断があったものと推測される。

本発表では、近年の出土文字資料の大量出土による秦文字研究の進展を踏まえて、百六十五字本を中心に古文字資料との全面的な比較分析を試み、『説文解字』の小篆の形体変化や秦文字との異同といった説文字との関連をも視野に入れながら、泰山刻石拓本の資料的信憑性について検討を加えてみたい。

(島根大学)

## 第27回 ('16) 書学書道史学会大会レジュメ【10月2日(日)】⑦11:40~12:10 発表・澤田雅弘/司会・富田淳

## ⑦三井本十七帖考——香港中文大學文物館北山本との比較をもとに——

澤田 雅弘

何碧琪氏は「北山汲古——碑帖銘刻拓本」『書法叢刊』二〇一五年第五期(147期)に、香港中文大學文物館の孔広陶嶽雪樓旧蔵館本十七帖(北山堂捐贈本。以下、北山本とよぶ)を、王玉池氏の評価「いささか鋒稜が過ぎて蘊藉の感に欠けるとはいえ、総合的に見れば、館本では、過眼中の最善拓本で、甲観と称するに足るものである。」を引用し、「北山本は、王玉池・王壯弘両先生が日本の三井聰冰閣本及び上野本の上に在り、国家一級文物である古樸穩重の吳寛本(上海図書館蔵「僧権」不全本)に比肩する特色を具える。」とし、三井本との関係を以下のように述べる。

「北山本は三井本よりも早い拓で、(断筆)があるものの頭著ではない。このことから、三井本の(断筆)は重拓あるいは重刻過程で版面が変化して生じたのであって、本来の特色あるいは刊刻者の刻意によって造成されたものでないことがわかる。」「拓本自体を観察すると、北山本は墨色が沈古で、宋拓に常有の簾紋がかすか見えるが、三井本は字画が断裂し鋒鋇が露見する弊があり、拓はやや晩く、翻刻本とする学者もいる。」北山本の存在は、わが国ではこれまで同類がないとされてきた三井本を再考するうえで極めて重要である。発表者の観察では、両本間に認められる大きささまざまな洩損や擦傷の状態は、祖本と重刻の関係ではない。しかも、筆画や刻には両本が同版である証も認められる。

本発表は、何氏の「三井本の(断筆)は(重拓あるいは)重刻過程で版面が変化して生じた」との重刻の可能性も、「三井本は翻刻本である」との一説も、ともに当らず、両本は同版であることを論証する。併せて三井本の顕著な特色とされる、いわゆる(断筆)に対する「刊刻者の刻意」の反映とする見方についても私見を述べる。

(大東文化大学)

第27回（'16）書学書道史学会大会

M E M O

A series of horizontal dashed lines for writing.